

## 村上三島先生の想い出

十三回生 仲辻 章

平成十七年十一月二十日 日本書道界の重鎮、芸術院会員、文化勲章受賞の村上三島先生が亡くなられた。まさに巨星墜つと感慨ひとしおです。

先生については大勢の方々がその警咳に接せられていると思いますが、私は、先生の若い頃に、教えを受けたものとして、その想い出を述べてみます。

### 書道教室開設

昭和十五年と思いますが、村上三島先生と、井上秋涛先生のお二人が、当時、千里山噴水前で、牛乳店を営んでいました私の家の二階を教場として貸していただいたというお話で、これをお受けして、教場を貸しました。

この教場は、当初お二人の先生が来られ、昭和十八年井上先生が応召されて後は、村上先生だけで十九年まで続けられました。戦争が激しくなると、村上先生は、大三島へ疎開されたと聞いています。その間教場

は休んでいましたが戦後、少し世の中が落ち着いてきた同二年から二三年にかけて再開され、二三年の春まで続けられました。

村上先生は、片山萬年、辻本史邑の両先生につかれ、その筆の持ち方は単鉤法（たんこうほう）いわゆる鉛筆を持つのと同じであったと記憶しています。優美な字で、草書、仮名がお得意であり、井上先生は、筆の穂先全体を下ろした柔らかな唐筆で、双鉤法（そうこうほう）で、雄渾な筆致の書でした。

お二人の先生、特に村上先生は、「我々二人は、いまに日本書道界にその人ありと言われるようになる」と発言され、意気軒昂たるものがありました。

当時 村上先生は、二十代、未だ独身です。常に和服で袴を着用されていましたが、その袴は何時も折り目正しく、私の母は、村上先生のお母さんは、行き届いたお人だと感心しておりました。

お顔は、最近拝見するお写真と違い、ふつくらとしたお顔で、目は大きく、少し長めのお河童のような髪型です。

教場は、私どもの二階で、六畳と四畳半でしたが、六畳には床の間、違い棚が有り、それを背に先生が座

られ、これを取り囲むように凹字型に、長い机（巾四十糎×二百五十糎）を並べて、練習させられました。

多い時は、三十〜四十名くらいの方々が来られたのではないでしょう。この同窓会出席の方から拙宅へ行ったとお声がかかります。六畳の間の道路側には、縁側（二間半）が有り、その西の端に、私の勉強机を置いていました。机上には、当時販売されていた講談社の絵本（価格一冊一円）を置いてましたが、来られる生徒が皆読まれるので、本の角が擦り切れて円くなっていたのも懐かしい思い出です。

教え方は、先生の書かれたお手本を、下敷きとして、半紙で上からなぞって書きます。一、三枚写してのち今度は先生のお手本を見ながら、練習し、最後に当日一番よく書けたと自認するものを、先生の机の前に持参し、添削を受け、よく書けたときは、丸、時としては二重丸がもらえることができました。

村上、井上両先生が、教場とされているので、姉とも、お二人に教えたいただきました。姉は村上先生に、私は、村上、井上両先生につきましました。

教場の成果を問う催しではなかったかと思いますが、生徒の作品を、平安書道会へ出展することになりました

た。多くの方が出展されたと思います。作品展は、京都岡崎の美術館でありました。当時お弟子の一人、小池輝枝さんが、秀作、手前味噌になります私が佳作ということ、入賞しました。この平安書道会は、現在も続いており、従兄弟の子供が入賞したので見てほしいと言っているので出掛けた折り、役員の方に私の戦前の入賞を話したところ驚かれました。

### 戦争激化

昭和十八年に入り、戦局悪化し、井上先生が出征されました。井上先生は東京深川生まれ、チャキチャキの江戸っ子で当時東京で開かれた教場があまり繁盛するので、村上先生の勧めで、関西に来られたと聞きました。新婚早々で、お子さんも生まれていました。「江戸っ子は宵越しの金は持たねえ」を地で行く先生で、預金など念頭になかったようです。お酒が大の好物でした。

井上先生のご家族は、先生の出征を期に東京に帰られました。帰郷されても、稼ぎ手であった先生が兵隊に取られて、ご家族は、手許不如意であったでしょう。

村上先生は、井上先生が出征されてから、昭和十八、十九年とお一人で教場を維持されましたが、この千里

山の教場で得られた生徒さんのお月謝を、全て井上先生の御家族に送られたと戦後になって仄聞しました。書道界の美談のひとつであり、村上先生の友情あふれる心遣いに感激を新にしました。

又、教えていた生徒さんが病氣、特に小兒麻痺或いはカリエスになられたとの話が出ましたとき、先生は「僕と同じだ」と瞑想され一言「可愛そうに」とつぶやかれたのを、今も覚えています。

ご自分の若い頃の苦しみや、悩みを回想されてのことでしょう。思いやりの深い先生の一面が偲ばれます。

#### 戦後

昭和二二年後半頃から、私どもの家での教場を再開されました。半紙などの教材が、払底してましたが、大三島へ疎開された折、準備されていたのかそれらを使用されていたようで、やはり、戦後を考えての先生のご配慮があったのだと感心しました。

昭和二二年の初めで、教場を閉じられましたが、その後の先生の御活躍は皆さんの御存じのとおりです。

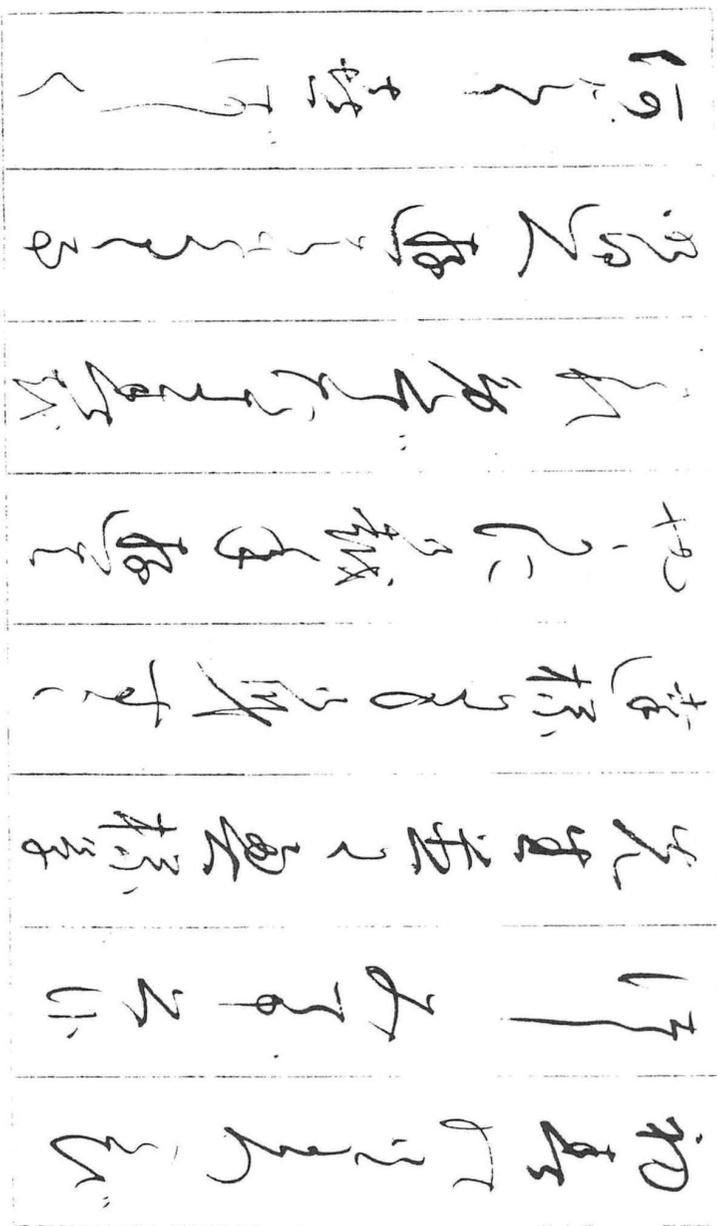
私は現代書道家二十人展が、大阪天満松坂屋で毎年開かれる折、時々拝見いたしました。会場ではお抹茶が出るので、お茶券をいただいたり、また、表装に赤

を使った派手な先生の作品が、大阪南の料亭に買い上げられ、赤札（売却済み）が付けられたとき、たまたま先生にお目にかかっている最中で、大変喜ばれていたのが記憶にあります。

二十人展では、昔話に花が咲き、先生のお手本を姉が大切に残しておりますと伝えたところ、近作とそれを交換しようかとのお話がありました。本当にそうしていたかどうかたのですが、実現しませんでした。

教場を開いている記念に書いてあげようと思うのだがなかなか思うように書けないと言われ、お手本以外先生の書は私の手許にありません。今回この想い出を書くに当たり、改めて、手本を取り出し、これをスキヤナーで読み取り、パソコンに落としましたものを、この原稿とともに事務局に送らせていただきました。製本時に可能であれば載せていただきます。

最後にお目にかかったのは、先生の古希記念展が、大阪梅田の阪神百貨店で開かれた折です。当時の私は弁護士になっていましたので、名刺を差し出しますと「ホー」といわれ「頑張ったんやね」と誉められたのが、懐かしい思い出です。



井上さんの半紙に残る先生の筆跡